俳諧一葉集

二

中村俊定文庫
文庫 18
817
2

俳諧一葉集附合之部

古学庵佛兮 編
幻窓湖中
坎窩久蔵 校

延享五丁巳春

眺のひらけたる松の内
瓜なすゆくの曳の山　　章青
ウ五すぢしめしものさる亭の芒　　章青
ひとすぢ住よしの松　　章
淡路しま仕舞をのこのそそくさ見て　　青
友よぶとうの立のうしろの橙こも　　章青
青簾のまくら白砂の橙こも　　章青
古菊茶ふれて追て逃ちる　　章青
虫時雨たたくにもごりあひのぬ　　章青
忘の秋こたたくのそらそよ　　章青
吉祥天女そうれなその肉　　青

ゆつくへ社頭ゆうる山かつら　　章青
松のゆくへはひくく耳たふ　　章
大黒社殿をおろかうひさ　　
かすみまもろきも天竺のまぬ　　
二多の壺を負女一文も物をとく　　青
風通過を制る件　　章青
暗の跡をおよ一茶通ひまれ景て　　青
うみもうのの歌うめの中　　章
地すゆくへ石内なくちひて　　青
寺の松山茶漬　　章
よ於の海老の隅　　青
雪汲ませて　　章

青章

青章

青章

青章

青章

青章

青章

青章

青章

青章

小林やそうしぶ八うそふ　章青
基不　ようそ　女のよの春
うよひ波ヵ二波八郎　春ろ礼と
かし　そ　物ろ　空物　ヨ　松　章青
ようふ　そそ　去物の格　つくそ　章
能　肉法ほ　宗め　と名　青
照つけく　色ほ　重ヨ俊つも　章
ろそろ　ちのこ　服ろの　青
飢餅そし　物ろそぬろ　秋の雪　章
多くい倫空　装の上　服　青
三　一葉つ柳ヵ　契やそめぬ寺　章
うけそ衣ろそうけそ　青

物食の物八う　章青
ヨ雨陳一重ヨ　浮物陽　章
花ヨ礼ろれそ　松ヨ　章青
花ヨ　服ヨ　章
果ろそそみの二本の下紅葉　章
ろし　秋そ　青
月すそくる原のさる跡中跡て　章
河内のふく　石　青
四ヨまそ川五の里し浦をく　章
浪そ　芦　垣　佐ろ　青
ヨそ名入江ヨ半物　章
やろう一流　松そ　青ヨ名

名

いてさま〳〵八瀬比叡法ごまをとよ矢八尺よ

七りをいてくく入おのうゑ　青章

笠置三井の古寺汲みけさ　青章

義さま〳〵旅しゐ吉野こち我　章

階より用よう八日よう　青

湯立社参手至合ひ　章

既手神み一つまひうをめひう　青

白拳阪八湯手より行て　章

つくしと今手たる陵山　青

うけ入新座八小林の羽色　章

更ふ秋八秋のあるくまよう　青

ゆふ〳〵手拍〳〵神げ手の　章

百人もみの月ようのれやく　青章

古文吉宴寺のつまる　秋　青

十う湯のまたふーや人のこまや　章

手拍たふーや人のこまや　青

舞のよう色秋の大木大岡座　章

詰をひうえこく多のよう来る　青

拝うて日本のまやうけめん　章

功能紙のうをやうけめん　青

笹手うこ禁の里八十国ま　章

白坂こゆ走八神のさうひ　青

同年春　章

梅の風俳諧あそばさるゝ　住章

こちよ〳〵つゝと鳴きて　靏青

まやこまんす雲のきめの袖そえて　い

けんや〳〵ぬ心のとゞけおき　李

きてこゝに中汁ろ方おそ〳〵歩す　い

うぐひすの声ききつけそめし時　ま

海べ〳〵そ雪のあと　李

越路ゆくうつの下月すさまじき　い

うの千鳥羽音こそ〳〵秋の風　李

寒そ千古用しは月の羽衣　ま

うつ蝉さゝやの山ゝ琴ぬて　李

青苔ふくひとよぎりふく　ま

松枝の木雪の流　李

業撰桶きよ村雨の出　ま

夕汲手ひやし酒さゝ　李

光なのすゝしさ山の端かゝる　ま

窓空のむらの雲柴の戸於さ　李

桐壺ゝ木ゝ志ゝち和葉　ま

猪のあるみやふるすみやふ　李

行ゝ六外こけもる月　ま

古里のふるのあもあて　い

志賀山のきふいこふく　李

さゝなみや二義ふ和さゝえて　ま

汲うて汲ふあ一京の末　李

ゆく秋を
玉のおやちくさ流
侍ぬ宿のよるまそ
上弦着よ
付よ
軟敷ハのうれや
寺井よ大ゆれハ
柿ハみのうみハ取
古帳う校点を引
火鉢をおまつ
河童のいけとも秋を

くろうの箸地
まき
三
新うまみ徐福うの秦の法くて
まき
まの毒ひそう乾柚一の分
まき
瀬戸の生命輪流をかうぬき
まき
舟才天そう　鰻さくまき
二月法うの法ふうぬ油うのそう
まき
その取の不二そ見ずの山
まき
かんふ屑たいかそうとて
まき
尺よく成佛府をおうぬの法
まき
能井沸府をしやう新の用
まき
就田のう集皇廣四五丁
まき

むくの雨宿をくろうの二そう
まき
人命の為地さくうまき
大災事を納けうのふ通
まき
やくしうゆるまの松山
まき
三
日本橋ちんそ下
まき
方くそをうそ結をして
まき
かいつうみそのそ作歌の法分
まき
誰ハうくうさ梯うまの管
まき
法千年芦の下ものいふの井に
まき
何として松そまうんん
まき
うま林も第うれ哥の
まき
俳写の去を雑のくうさ
まき

物語作者自彩とよろれそう
まき
玉家の秋そ癪の舟ゆく
かみそうも内仕事をする
のうまれつきとみえの雪
衣桜も咲そろ陣勤の花待そ
まき
名かくの浦嶼を尚多の書
まき
先稽や空んとうけそう一つまく
天そつつめく虹のつてそう
まき
その四隅矢門ハ手本を校くさ
日傭の乳そ魔物さもそ
まき
猶さ新勘海金そあまとく
笈也ハうみよりさうる栄の五
まき

人とそ思ふ
新そまりそ
いまの松ひそ
筆松のるそ
新そう趣訓今川寺そ
さてこもそ二条寺そも
都の月塊をそ
保阪ハいやそ
さ
よそ新筆そ
大和の情そ
訪筵式本世
自世いま栄

咲増ハ雲に流るゝしかく　章

とうろ矢二筋まふたしの先　青

軍ハ花追手勝負となみ合　章

千騎何百きさらぎの花　青

同年冬

桃青

あら何ともなやきのふハ過て河豚汁

信章

寒さしさりて足の先まで

信徳

居合ぬき霰の玉やみだすらん

青

拙者名字ハ風の篠原

章

相應の御用もあらハ池の端

徳

御免さこまかすかしハ餅

碧湖のほとんど何まで月すみて　青

更て志はし小便の霧　章

ウ おそ耳やよそにはやしき荻の声　徳

難波の芦ハ伊勢のはまもいち　青

恐しきろは拍子くだりてふしくな　章

かくて小船や檜てうかるゝ　徳

物慎よ理しるめゝ季あるさ　青

干鮭四五枚これしきの恵を　章

寺の坊かまひ物くる霜花そ　徳

みしうきくる鍵て眉つく　青

鞭打ちよろつうれしそをきのり　章

奈ら積つき猿猿の坊坊　徳

嘯つきの坊さもん　秋
千一休子　そそやの舟　亭
花のふる朱鞘を跨ま夕雪　法
いりやきつけ岸の山茶　素

二

よ雪川をそそ菓硯　亭
我儘そう　多ゆく　法
風まく物枝百年劇さん　素
歌年特の　の紋のつつ　亭
双六の菩薩さらす仲裁　法
宿生の　をすらひとそ　素
用の朱の多用雪等の三瀬川　亭
かつ尾池ハかつう　法

小家国さ大阪のうつみ鯛　素
殊の飯椀とまつ　亭
二三秋治さまくる　法
月八むつの親仁友　素

蓑笠多れてきつ　亭
胸等用めすきみつ　法

三

線度を半　素
季手ふる　の秋宮風子　亭
呵さ越て石魂忽花ふ　法
古川地義　の菓子付　素
語うつめ人ちつ話尺さ　亭
文云うつを笹ちつなん　法

今うち新狩をもくろむ
物すごうふけゆくまゝに
の月八巻の二段よ追ふみて
何そと問八猫の目の
月影や夏の琥珀を曇ふれ
短元うつゝの音す
法のあふ法華を非ず
名跡のあふをもくろむ
三上ゐの越のふ雲
百茶石井水のふ
学ふ樟その帝井沸水
宇随極めふ豪紗撰集

掛元も小河うふ
うたふ村木の枝よ寝ふれ
小狩ふ庭八巻をもくろむ
多入巻八ふをもくろむ露
海学やをれ井ふ山の秋
ふ染人うふの葉れ色
縄帯れをふ井ふ
うたふ雨夜のうち合雨ふ
庭のうれうかふ外ふ
森の新風ふ狐てハふれ
三笠の山をふ引のふ

芳代の古名 まゝ
雙林寺の 亭
田子の浦波 沈
不二見ゆる 亭
おハ海入 まゝ
松の根まで 亭
浪越る 沈
尾花の 亭
糸を前の 沈
波をみる 亭
元禄 沈
旨しをつく 亭

名
跡の古一里二百廿七町 亭
比奈ハさゝふめて六里久山 沈
里今のたゝ引宿より蒲原の小ぬすみ 亭
里駿河の橋の上より蒲原 沈
新宮 女郎花 亭
祖父祖母 沈
越をいくつかや 亭
米俵 沈
木曽のタ風 亭
章詮夫妻 沈
もゝそやもゝそ川舟 亭
沈

近宵六戊午春

雑田風遊遍もをたのもれて　李
二人よ笘れ浪人小姓　法
仲享ちきれうともいも定　青
法〳〵けやつけ残そうの母衣　李
心をあのさこの法くをハ　法
浪やき入そ大釜の洞　青
笘俳法地柳のうくさう法　李
弦枝解のをひを伸くる　法
海の月法事歩の法猛智　青
二陳の内俵お文の寿　李
有を取納ふさうまる花芒　法
神屋そハ安帯枝まう　青

瑠の底入行の沙李を分く　法
のの面ふしまと鴨の笘ふ　青
山うけ鼓遊笘ふしまれの笘　李
三十三事秋たてる底　青
寄帳や俊風仇のおうけ　法
宇笘法ふ小俊新書意　青
いろは顔枝主山まうう　李
をを塔猫子叶白俊秋　法
新ふう出月法の事根ま　青
肺の笘枝ま一枚　李
智卑さき安ふ峰ふれ　法
まよいるれ毎緒うめけう　青

侍ぎをと人して
意思と朱そ寺八千まき
西之うき玉ふれそるものかう
うに色まそとそとそ
おハ沢東殿山の大石き
花のさうに河水をよふ
まき林の数ゆいしやい
お景そもう加賀うしう
まそしそ地体
先章う弱まそれ
名のたまそけ
沢生侍地の玉寺
まき

心中う山林竹木拘きると
永寺の宿在業把和の内
三十才の和尚のまき秋ちけて
阿弥ハうさ清やまお寒
章のいと祖所の店の風流
うのいまる候篇のまみ
老の洞まそ人おう
首そけの想性そよそ
うき井八六年寄汗うて
家しの書おまきく
まふ山お大板家の書おまきく
鞍そ侍正ま床入の山

寺沢寺

若宮のさま おもしろく
かつ〳〵すゝのこ 和右近 ゑん
雲の月 橋の 物 ゆく 飛
すゝき 山 も 悉皆成佛 亭
(三)
尺性の眼の光 陽の 珠 法
藤棚の 久 ゆく 因果 ふるえ 書
走井 を 名 ゆく 水 ゆく 亭
志賀 ゆく 十夜 自 さこ 法
大八や 三の 君 ゆく ん 書
日 庭 を めし ゆく 亭
山 森の 柿 紅 ゆく 法
青 等の 月 白 羽 ゆく 書

宮内 宮 ゆく 亭
よう ゆく 谷 流 ゆく 法
山 ゆく 流 舟 ゆく 書
流 宮 ゆく 亭
白 ゆく 花 の 色 の 法
名 駕 阪 中 ゆく 法
延 坂 を 步 宮 ゆく 書
山 ゆく 山 や 三 の 丸 卯 今 亭
軍 ゆく 飛 鳥 安 ゆく 法
松 風 音 ゆく 法
古 物 の 庵 の 芝 の 延 葉 ゆく 書
楚 王 の 力 ゆく 法
校 河 の 秋 書

節の雪の新
よくしやかに八重を折る　沾
ふるよう十万億土も鼻の先　亀
糸おらしなびの琴琵琶箏　芦
音楽のふり三味線めいの爪　沾
四竹さいく伴のもの　泊
姉添て御伽は五尺のびてとも　亀
ほめそやすのの佛まします　芦
ゆつき黄金の膚こそ　亀
小姑みてのふの革袋　芦
舷枕納くそやきし婀ん　沾
翁く仮のちきり幾久　亀

そのゆきそうくしく汁のうま情　芦
垂理の英社のまゝを折て　沾
宝や花白米てゝ焼茶子　亀
白ちく帰りる朋輩の百　桃葉

伝徳

同年春
物の名と蛸やき古郷のいのの字　桃青
作く春や蛸やき百好里す春　伝意
峰まをうみの学雑俳神く　沾
ま人力の車風まるも　亀
熊つのひもの人のうまくまる　芦
ま右を学ふ神のうの字　亀

雲の絶間の
尾花うち靡
ウ
袖さへいつか
丈ハ山伏の
一念の鐘と
かもちハ児の
秋ふかう
秋のいぬのき
魂をこゝに
流石さくや
骨うつき忍
三ツよふ

泊雪
春
泊
春
泊雪
春
泊雪
春
泊雪
春

夕雪雪山風
本所さくら
若手衆頃
猫も一つの
二千俵俵
勤め当ゆく
秤也脱手
八方能
飯張や十
九いのち
ハ春去の
うぬぼれ
ぬ

泊雪
春
泊
春
泊雪
春
泊
春
泊雪
春
泊
春
泊雪
春
泊
春
泊雪
春

関西までの掛け合い
火件の巻　法
本三位綾子　春
貢の巻　法
かさく雪を　春
愛そう花のよう　法
浪能きり　春
玲瓏の手毬　法
色のやうな　春
買うて帰ると　法
いりの大吉　春

勿論家の三女姉妹の
妙嶽やふ　春
小柄めな　法
減金のう　春
ま玉椿木　春
岩戸ひら　法
路の文字一　春
抱かかえ　法
秋や学の二代目の　春
ようの帳帯　法
花の枝綾子　春
月一冬れ　法
厳人参　甘草　春

名

於四友亭無行

似春

次広て秋志賀寺良休元でも見ハ
ありの〳〵の湖さし〳〵月　四友
汁の石玉ら計神の雪それて　桃青
見きり〳〵れてやらの雪しむ　〃
山松ろし小寺のみちとふ　〃
きり〳〵ろこうろまるまるあくひ　〃
雛海苔ふまうり〳〵様さく　〃
禁ま笹おつてらぬゆく　〃
ウめすり人と三笠のまやふん　〃
火仕の歌ちと〳〵〳〵らまこう　〃
学籍の風公儀より烈〳〵くて　〃

湖高ふそ白芽の　〃
玉波中新手むさふや　〃
洲崎の松みひ〳〵牡ま　〃
てうち〳〵吉祢のおれひ〳〵を思ふ　〃
誕の笹手　様うう〳〵む　〃
又や寺酒屋門茶れ物もひ　〃
寿如四百八十日　〃
芽吹山ふれ〳〵式寺の世う〳〵う　〃
浪ま〳〵岩をきつてのそつの　〃
花の越角の松鶴和仲そ　〃
書物ふおれつる　〃
二血の笹ま〳〵み幾ちのまの色　〃

胸のうち
初めをわ
時雨の松
お和佐子
富美の月
桃元やう
芦の九風
海よりも
さーむの
甲斐う和
日上人お
尾崎の大
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ

新代の嵐
ものれハ美
れて 歌
お使そう
二号をおく
布の月や
既そよ
そゝうさ
てりち小
冷食を
是生滅
於悩の
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ

寓おもておもふそハ誠哉て
ロ情の発れをやめくち印
ふ〳〵まてゝ多郭公吹
ひよんもゝ安堵のうてや帰雄
おゝとゝくに過ぬの雨
お情ちゃのうほとの本ゝとそ
相手のつゝみうほ人
出数のまおもうう雫れんを
笑ちうひちまゝ
幾月の出れうくやほまん
とゝと岩相ゝ下共ハくに
孫清ゝ池ゝたゝめのと

嘉
嘉
嘉
嘉
嘉
嘉
嘉
嘉
嘉
嘉
嘉

ゝうよ情を相てくみよる
ゝ名前の秋手そ〳〵おて
ゝ引うゝく星のこうゝ
なゝ〳〵と天の戸ほその雲の月
三ゝ命を乙和をゝ
孫のゝし国乎秋
山ゝを野ゝくすゝ松木の
ほゝのゝふゝをゝ隔里
多新を塗そ仙境千入
ゝを桃村村やゝん
雲のそやゝ村ゝゝ履ど
ゝゝゝゝ祝ゝ
ゝの礼お門ゝく

嘉
嘉
嘉
嘉
嘉
嘉
嘉
嘉
嘉
嘉
嘉

衣を肩手うしろに仕合
風手先白雲帯をゆるやう
秋風起てもみぢよつて棒
拿遠を内のさくらかな
尾を引すゝきて森のこそ
御神燈別れ花ハ雨
名
捨けるに二つのまよかいそう
うちおろす庭の小玉のかくさ
雪降て伊勢まで通す橋
ふみ石ぬれて小仏の中一ハ十七
小仏の砂手むつひ雀とり

物おもふ春の西よりて
春の湖社吉を訪てもう
方岡の二ツ話一足や跡ゝん
ゝ舞おりてくも隙ゆきて
秋の二階気火入をけるもの
惜春の紬そ一身をおもる
思ひ捨れ恋の衣をつゆ御し
空蝉等眼手くらくくくれ
ゝ簡情ゝそゝきゝみ
黒ゝそゝろまハし
返刺の話を尝めて先ゝ

城横弦楓や味つくしむ　雲
千季の言葉改まりきて　青
折々に松手香の花ほのく
より金の花　郭公の声を初　雲
山そこなみの言葉を初　掛雪

旧季秋

尺蚊をハ洛れハ尺蚊の秋
桂の帆そらら十分の月　四友
さのつそみをそすする夜さ　似青
山ハ孫手豪よむ
志保そ家ら人や　青

うけつそハ
傷を鄙歌魚　雲
香ハそみ手峰　雲
陰そ　雲
物経さ　雲
みのれもるお　雲
木綿苅山ハ　雲
潜る根ハ木　雲
物を墨を行を　雲
雲尺ハよそ吹　雲
扇跡を重ね　雲
の柱の大　雲

朱老のことなど
俳事すこぶるおれの性やいくぶん
霜もの
花のまを選山やまようお伴く
宗生のこころふかき
二句の旅すまのくに
ふでを折ふしめやかく
春のゆく定家
雪そのほのぼの月
八百手沸姥の
狸のこんもり
狼や香れ

谷
一空等岩手
雫をおく
ちぐさ切
涎の仙
雅を救う
秋の径
三さささく
いさまざま人
強の数
西哉
おもくからさハ

新仁井紙法
蒸小紋の羽織
法ようし礼綿
骨脇を末幡の
智恵ハかれも
綿の骨いくも
又多井ふ
阿蘇熊本の
うすみの
三
紋引御羽
法御ふ

書
書
書
書
書
書
書
書
書
書
書
書

法ふく 長 船 大 和
世事雑記を
蒸ふハ事
国柔更科の
蒸男蒸
又ふ孔ふ
附手ハふ
不心中
ふ作角糸
寺の小歌ハ取
秋を通ぬ
三
家滅の貝ふ

書
書
書
書
書
書
書
書
書
書
書
書

石こゝめ多く土本の香
大地震つゝみ或やのほとむ
長十丈餘ありつゝ
加入ほその被害甚敷
免牛馬多く圧死せしもの
ありと聞く
新橋板をくゝりつけ
古家の伊勢の山形をよく
江内八幡社内
さゝれてそ秋風
色そ濃くなる紐(ヒモ)解(カイ)の雫
待宵の姿思ひやる

名も
新色此頃八
代八幡
旬日まで
たゝけ狂
口舌まで
うまのこ
そをおつ
栄る別
名手物
職新橋
料一ツ
寄席
寄席
寄席
寄席
寄席
寄席
寄席
寄席
寄席

けんどむ芳まや山の湯はあ　春
小雪の雫手湯つ舟と月　春
屋平　池む歌笑　の　春
雪風もこ山春霧よかくれう　春
院八月物まお人形法風も　春
海士の笑うしハ秋のように　春
功名芳矢よりて秋をもつ　春
八雪至　庭　春
面新社松ろ一大松名くさ　春
あう降るようむ秋の月　春

同季秋　春泥
のゆれう松の大幸江戸の秋　似春
納のかをもをき金井　月　樹青
菊やとの女きを降て
海舟の如しいつ行浪　ます　泥
雁の松しいつれ松の原　春
与作ひやかも仙境で入　春
そのう雪よの上まで笑　泥
いつも　卵　春
泥所うそお海ハ　春
むりとせまごの行き海名はよみ　泥
むりとせまごの雪はそいおく　春

帆そりハきむらくひかりの跡　春

同　似春

まつ葉より紅葉ちる旅ききる

みを盡してハ佗る古山　春澄

都杖手かゝる身の新酒とゝ　桃青

扇子ハ肩を忘れつゝなり　春

気よときゝ志めの木末のぬれ秋の風　澄

天下一竹田稲をかす志ん　青

ウ浣む絹も綾の衣けふ尺八や　春

やよ都に天帝のきさき　澄

笑ひ所不変不抱きまゝぬ涯平　青

秋のりのとくハ古ちかみを　春

ちハ根ずもゝの裸でつくるし　澄

夕風そのちハ説案の春　青

出女針玉依姫ハうれとまね　春

那代もきゝす百文の恋　澄

霊宮の枕草子をとふしおみ　青

来かの帳北背ちまさ　春

宮中に儒者一人の有徳て　澄

或ハ庭ほ熊野の秋　青

二 性以枕の光をうすれさる明の都　春

とうしふ百千志おむ和萩　澄

子っ納の庵すも髪と生ふさ　青

小町が家より女方とも
おこせ給ふきんの
告手まとのをて
あく給ふうしき
枝の葉をもく
針立よせ雲傳
秋そて曲輪ハ
ゆふ松枝きの
四五文字とう
文字のけちハ
ゆふつう波ふ神
竹戸柳の波の
渦きう（しまき）
山ひこうぶの根
耳せをかくす
同
波打てとうさう
おとその浦る波
川波の松木や
ま事手まる
又とうのうら
うとう吹かす
ふうすうのそ

雲
波
書
雲
波
書
雲
波
書
雲
波
書

峰の巣
書
波

野
青院
似青
書
波
雲
書

鶉の床にまくらし嶋　沾
産めすかみえし那とや思ふらん　素
きぬ〳〵のわかれ天のつくし山　素
伏見姫のよめり聟らもちさく　沾
古筆に見える仲人の名

同　桃青
宮や月百日千金の通ひ町
夜千数しらぬ青楼の客　二葉子
新蕎麦や三島かされて田鶴か鳴　紀子
芦の葉らゆられし味有の浪　卜尺
基雲柄なし小舟こぎ見へ　二葉子

一に男すしきゝ京の姓　桃青
余りのを先悦流されける　卜尺
菜草喩ゑくまりこしらへ　紀子
去瑜の法論の役を勤て　桃青
孫をとまつの千緑青の山　二葉子
濃ようの峰より月の前うつり　紀子
秋をや布北床の山風　卜尺
楼まの鶉啼すまうまくれ　二葉子
精を付けれ三位入道　桃青
かくとや猶いかゞ便りもなかりけれ　卜尺
又座をくはみ子有なく　紀子
常は御方金子をねだらん　桃青

註田のおくれ特産こゝ
毛織を沖門の用ゝ綿おと
そよ和愛嶺笹葉する
強れ祭沖表のかよひ波吹ちよ
常ヲ羽ゝ
押入や淀のこゝ北宮陽ゝ
織まのまし物ゝ
能ゝ夏寺ゝ財ゝ
屋様うゝゆくゝゝ
烏郭ゝゝ松ゝゝ
姐板の内ゝ
昔の秋三ゝ餘人の拂物

二葉ゝ
紀子
卜尺
二葉ゝ
桃青
卜尺
紀ゝ
桃青
二葉ゝ
紀子
卜尺
二葉ゝ

釋かもらのようを交合の附
二ツ板塔ゝ精金のこのをつりい拵
大牧ゝ川もものこ往る
秋明の火入ゝうや号をうゝ
君一口ゝ伽家を吹 剖
笹の附ゝ方といし笹ゝ
恙井ゝまのゝ王代の書

桃青
卜尺
紀子
桃青
二葉ゝ
紀子
卜尺

同七毛非冬
ゝまれ学超業ゝつまん季の雪
荒籬味噌ゝし岸待ふ空 千春
浪風の基稼ゝ餘ゝ河ゝ 信徳

初秋奈の三郎一とせの月　素
出の春つくつく一声ふ雨　雲
いさこ去――さ百物の　法
ニんとれなて成附をいそし　素
園生の赤葉をる寸四竹　雲
訓さやさ――乞食の妹背もる　法
うろひよ伊勢こまのきめて　素
思ひ川始教七つの　雲
青葉や稲荷の流つもの　素

同手春
等想

きけふ二内中旬　桃青
天下の秋のみ　松風
雨素古意ふり　賀
志ろお嵐子　気
雪雪ふ赤ぬ　越
谷の戸口子　松風
上ニ吉ふ秋　而已
ま里の雨ま　執筆
金谷の秋

同

ふつくや夏籠ふ　桃青
山を志ろし櫃の　春
ふ春　松風

まの栢やの庭梅月まつて 風
こぬての ころしし 風の みゝ付 青
何ゆすれ餅ゟふのむらふの出 ヽ
精ふをたれて峰の松まろ 風
知りつのけ岩根の床みさ紀風 ヽ
あり何をふての寸束のしら浪 青
ミ
菜中さんふむ袖より傳ふ風さて 風
何とし枡手盆のほけ初の 青
五十点ありけもほしく浮 風
ひとむらしやうを絶滅しを覚 青
随筋千ゆめんてきにる流の象 風
青雨ほゝしみ松を姥まて 青

小萩がゐ思へきのひたら浮やみ 風
そよめ何のうしきめしの末 青
風自ふ小便寄手浪こして 風
夏吹拵る給み夕つゆ 青
白金み秋や彼手鹿なりん 風
ろく志やし書む山のたれ月 青
名山の寒色郎彩子寄ゝ花の浪 風
霞もそろしにくゝるかき元 ヽ
二
なるき板は被手青北志のみ珠 青
嵐のほそえ方ふりきり 風
米俵ふるえのすまゝそまてむ 青
四手ゐふ出替れゆき 風

おもくさ蒹葭ハ花ハ
もゝのくさ山里の春景

次韻 大和元年丙

表題

背伯倫傳酒德頌樂天續二之一
酒功讚青追テ續信德七百
五十韻ノ

二百五十句

功ハ三をなすハ古ゟ
又ハ三ツの功ハ
三ツの功ハ

追句 ハテ 莊子ニ可レ見ヲ矣 其角
徐甲ノ子ニ 才磨
楊水
角
春
水
磨
春
角
澤
水
角

[illegible]
弐(三)士ゐ双まうる引のけ　高
女ハふくそやおとしいむ　水
さハひく隠めこる恨　鷹
うろゐ猫ゐ身を宵けう　角
家子宵を思ふ易別易し忘　鷹
乳子一の穀の筒う筒の葉　水
き秋を花く食よいくる　角
白魚をかふ餅の宮　高
宴垂ゐ勢ふん俗仙会をう　水
情七提灯を枕一ゝ残る　鷹
くたふふ女房の赤ふ　高

血椰ゐ霜まも和や翠ふん　角
ふれ声一むくる起ふなふ　鷹
国柳の心をまものくふハしむ　水
名天帝子国海を書きみしゐ　角
桂ふ堀うる星(ほし)をうゆ　高
帝の撰子風の架ますの心ふ　小
秋子多一ふ白き新仁紅葉村子辺ん比　鷹
絶の火新朝師魚ハ諫め鰻ハ腸を割ふる　高
安房の岬ふ仏人多を活　水
向ふふ吸隆を　角

相北手 初春社 魂鳥の舵 素人社 狭手 仰ぐ加 氷
雪をそ 夕等を 風う妻 詹
夕等を 民劇 脱をせそ 角
次ひの木 まさ 安わく 詹
有元を 氷 角
あそれ 紀亜 小初よ 素
約おお 芸る 神宮社 素特 詹
素

幕子 角

同

其角

素洋子 才麿
素洋子 楊水
月をま 桃青
安子 陽を 詹
松堂 角
ゆやし 素
多高 吟 素
松盛 角

ウ
雨の関すけて敵を許さる
春甚手 供れ 陸枝折戸
よひつゝ仁上手より安を妻て
やきんさゝ 寄さを越しく
寄さゝ後さ 水 角
女の髪 物る 春 唐
ストレト笑入 ゝ 水 角
取物 杜のまつこゝ 唐
春の院 汁 沙陵を 水
春

光明たゝん人ハ名を張るめる 唐
ま国の春を寛て 角
二 渾（ヘンホウ）池 理 春 水
物 ゝ 角
雪の笠女 ゝ 唐
よ 京 春
椿軍（ウ）勇 水
汁 向 春
家の方を 春
唐 訶 唐
おと 笑 角
物 ゝ 春

羽屋鬼灯の
踊狂衣此
海の月佛仰
去来やう
江皆死撃を
ほもゝ子角
筆地誌。根の
天火く閑の
三
枕江の残水岸ホハ志く浪ま
ま海女ゝう〳〵い蛸琴を弾
花の篷ホ一芝を
角子仏ゝ
ま

角 鷹 水 ま 水 角 鷹 水 ま 鷹 角 ま 水

ま
夕ゝほゝもく
松の木ホ増
枕の清
等の外を
糸一ゝ
鳥つゝを
泥竹清
等のれく
秋の里
名
配和人芳の小
ゝ久北蘭

鷹 角 ま 水 水 角 鷹 水 ま 鷹 角 ま 水

笠やむ朝千鳥さす小舟　角鷹
まだ尾ある秋を山志水
麦畑は蟹の多き奇妙哉　青寺
秋を待つ稗のみのれる遠さかな　鷹角
なやきのこれ生国の森の秋　自牧　淡水
津のおれ生国の森の秋　自牧　淡水
そさまこ千鳥食嬉す　水角
雪ふくる里は粥配る冬の月　鷹
寺くの納豆の香の先を行　水
まこの秋の稲花こ甲の香の先を行　水
栗茨ふくる小野の月　青

腸をそゝる秋の清水哉　角鷹
義みすこ秋千生迄一ツ法　水
竹の戸を人まれ女うおゝこれる　青
歩て行そうみこくよ　水
海のみまん〳〵と雪をれハ　鷹
まとををくさる月は朱　角
筆作ゆく寸詰花そのうつろひ　青
此泉法ゆうまで力　水

才鷹

同

幸ある家を八軒の秋の雨
後をく月千株萩を買　楊水

骨カなくしてけ疲のもろきし
疲しるこ一つの肉子物てよろこびの新手歌うつ
米しく音は耳う寄けき
さもかびく学ぶ秋しもそ
学孫屋士しくる月
笹葉多杜もの
二后雪の藪入まやこ陸る
新しや上おほて
阪中つ手投て
投打まつこ雪のつけろひ

角 高 水 鷹
水 高 角 鷹
角 高 水 鷹
水 高 角 鷹

桃青
甘角
水 鷹
角 高
鷹 水
高 角
水 鷹

風おの角物とう
入ル山ふもみ 狼手 のう 角
雷の爺 丁(ハチ)さとそうそう 水
言くく又言 ― 疏改の玉 廣
俗のしふ麻高の 角
郭のまれ東吉 堀 青
何を受て 詮すう 廣
ひとの ― とう 水
身を蔵久竿の 廣
栗う おてや 青
三 参疏のねじのいの 水
ま収起くう 角
第一 ふめま 青

釜こうぶう人ハ志のひとみうう 角
穂そ ふう ― だくう の 青
古家の法のう 廣
いいちのほうう 水
麻の挙手生る小斛を 青
ふう牧さまふのう生め添柚る 角
きふれくて法ふ味とすむ有ま 水
めうく霜茅をこのり海ま 廣
屋宮の食くく 角
人死を待ふ 青
石ヶ曰ふのめて 廣
木ふまふて風を毒 柿 水

三

去年の秋より松引き入
お里子廉井
松葉をしまのくに松ばやう
名残惜しの
扇折女八重子折ふしも
丈八尺ゐ戸うち
もう一歩さしのべ
乾まる等のお客
狩に来る上ろう許くお
仕眼うち
書過ぎ去の
戯斗を狩め
ぬ一ぱい聚窟のうめ八松
有間をとく
風の月趣の
雪多き小倉
山紅葉
筆の枝形
完成の極
春をうたい人の
血を語る風
古事をし
角 書 水 磨
角 書 水 磨
角 書 水 磨

[illegible]
松ハ碎[illegible]

同 竹無
附贅(イボ)[illegible]
を用ゐ枝を[illegible]
枝ゝ[illegible]
蓼一種の四味[illegible]

天和二壬戌春

弥[illegible]
を[illegible]

酴醾(さとうきび)酒(ワイン)入ル 青

楊水

桃青
其角
才丸

棄坳

山[illegible]

[illegible]
雨双亡[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
孤村[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

吐雲新波の水は清きを見や
紀の舟伊勢尾張松
波八百潟まみれる
契情千鳥
今宵寒き
柳の枝
庭掃根
いまぬ役
雪さえ院
おでみのかみ
恋れ鶴を
当座のみ

雪月花の時の友
雪のふるまひを枕つく
山ぶきの花
野の露
雪月入日
をを
松蔭の祖父
咲ては
成下
旅小刀
妻籠
かりすゐ

稿上れ雪をハ待をうらみうる
西瓜ハ一(三)ツ〳〵ゆ満し　む
月ハ蓼(タデ)虫の古もやうれ角享の夜　秋
道幸のようそそ歩ける歩ける　暁
つき〳〵寒ハ歩すれ歩すれ　旅
百姓の家ハ入て　稼切
是ハ手先祖の榾の火の消ぬ　宿
対〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ　菌
ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ　雪
蓋(ハメ)尾(ヲ)ハ猪(カ)う待う待う待う待う　暁

名(ナ)ハ雀(ス)ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ　雀
をふくき菊や花の湯つき　月
沖(ヲキ)波(ナミ)濤慶(ケイ)後の渡ちまし　湖
蓋(ハメ)ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ　鴨
名(ナ)張(バリ)雀(スヽメ)ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ　雀
学(マナ)ぶ(ビ)情人　秋
月ハ向ふ山寺ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ　月
名月ハその筏(イカダ)ハ(ヲ)ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ　堤(ツヽミ)
常本の筏ハ(ヲ)ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ　湖
名(ナ)ハ雀(スヽメ)ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ　雀
神手入蟠(アリヅカ)ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ　角
海の玉ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ　暁

我可り純吉て胸の中を
閨迫来 焼河手猶を
肩を結く 短舟ろれを躁く 吹笛
真まく の仕色 隅ル塀 忘
笛火を刀そうけく きのふ已 業
浪ハ井結くす 人 吹
物洗ふ盥をもくるくに 掛
昔つく白れごとくし 暁
市松のあひをみて本語よ 業
ク傘ますみと姫と男と 吹
云寡て純手をさしぬく 笛
物ともも思す 銭 掛 灯

花のもく空人物手猶ろ笛
八重 寡来かて物 角

秋風

野宮ま伊勢の山越末の雲
多ハろもとかる弐の秋地 悲蓮
店袋のなお軒端ま春の来く
ろろかく 風
黄白船され 多
後を来ル 接八八の七つ
病くきく俗の指手寄黄て
きのふれ海を結年ろ

消ゆるまで燃ゆる幕の火玉のみ
火魂の体の一二寸ほど
伝まつる後めぐりて江戸そだち上野ぶさまの玉

同

玉ものを重ね着を張る少の如
着ぶくれ洲も洲崎行けば徹る
薬の紫子洲崎行けば徹る
張ものも張ものも着る
面洗ふ紙の
さらさら、二十八針きん

芝蘭
薬研
一品

うきさらさらや武家洲の翠簾の透かさらん
かさらさらも格子の内の
文さらさらの
釘の雫を受ける人あらん
一盃の酒を貰ふ人あらん
小蒸す風 張ムル 倫 乃 雪
クツロぐ簪や 眸 巡 葉
眸萩朱也 ほそ
萩折を橋 八 朝
葦尾 ほ

二
陽炎の具屋庭作りの中の大工
蝶ゝ蝶ゞ百年の栗
さ郭のしらみに花茂の袖を引
梧のう頃は清く消されぬ
血て流さ甲を形てのけ置く
餅をむすぶる大事の篠
長実のさ危食ハ家の紫竹
手あそふにるは牛葉の上薹
肩ささ頸ハ又あみ蝋を立て
古佛の般若経を見し月
為をしられ荒山伏の袖ぬれて
佗白雲の店ころうて

二ノ
ちりたる牡丹ハ昼の加茂大手
白袋柚躍ほや免葵飾
禾汲免る乙鋒まろ雨降れし
夕顔長若且ありけん
九ッ竹縄てて霜に花を烘
序を立孫す庵の文樽

同
故竹垣繕て木瓜も常来る
笠抜もしるや雨の家抜ろ雨
萩ほとゝ芽て梅を掛けん
市て小雪を荻ふ鈎月

麋塒
一晶
芭蕉
塒

晶　良宵の屋いふ細をおのけて
笹　紅白の菊を手巻を採
榭　静るや卵塔場の雨のうるほひて
晶　今人ハ墓をこのうて衣裁る
笹　梅与社友矢ハ洋窩ともおもひて
榭　上京の弟とくるまいくるみ三線
晶　そゑ玉の稽をいくそ
笹　窓丈ハ風よいのちつれもなし
榭　新のほのぐらみより起きて
晶　ふしゐを契きくる葛のいのそく
笹　母の教子話やそくる肉をかぶりを
榭　うも経さそくぬ多をさへ新そく

晶　通称来の路学ハ
笹　指先清ふ新
榭　まゑ風の他ふ新
晶　かふすすハ隊を告るふくふ
笹　院の河子餅米苅ん老て
榭　青萩落社ふそ織する
晶　風の絡糸ふのまをや指ふん
笹　舟野をたふる老行の蟲
榭　新一き塚ゆさくまふそ
晶　庵を後社原ふ人ふ
笹　な金そいやし裏玉を宴ふす
榭　琴蝶も指れハ納くふ一や

十季の三年を老の九十九勢　晶
室のそら　蓬生(二)ゟ念仏　ちをく　芭蕉
猶坂ゟ清水ゟ祇園ゟ清水ゟ　晶
為ゟれ雛おゐて海を賀をつ　芭蕉
おゐて巣をまも婀娜の女房を　晶
俄狂の女房の浮牡人　芭蕉
ゟ跡ゟ　　おくゟ春化

元和三癸之年

芭蕉

ゟそゟも春も無事海老ゟ食ゟし
ゟ酒ゟの痩　一晶

おゐて　ゟ　ゟ陳ゟん　嵐雪
ゟ　ゟ　ゟを　ゟ折ゟ　ゟ　梅　其角
身を　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　嵐蘭
浪のゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　執筆
ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　晶
朝ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　芭蕉
浪人の　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　雪
ゟゟの一　ゟ　ゟ　ゟ　蘭
ゟ猶用　ゟ　ゟ　ゟ　晶
ゟ八退　ゟ　ゟ　ゟ　芭蕉
雪ゟの　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ
ゟ照　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ

雲竜の硯を	蒔絵	兼代より
雨織子	角	
竹うら	硯の箱を	のくら流体被
破蓮	絵竹うら	次
多解子	硯を	筆
つくし	蒔の松	晶
矢つくし	硯箱	雪
雪ハ私	蒔絵	兼
松入	硯箱	角
竹折手	硯箱	筆
人の	硯箱	晶
松たて	硯箱	雪

同

きくや	蒔絵	角
山一野子	硯箱	兼
岩井の	硯箱を	筆
木賊ハ	蒔絵	角
矢つき	硯箱	筆
名ハさん	蒔絵	晶
硯の	硯箱を	雪
竹子	蒔絵	筆
名ゟ	硯箱	角
松子すゑ	硯箱	兼

酒債尋常往處有
人生七十古来稀　甚角
行樂須及春光好
今日湖頭暮ヲ鴛ル鳥ニ鯉芭蕉
千死き恵ヲ関をゆるすもの、角
三綿人の思を注ぐ一掬
角ハ翁くるるき仏の膝の上ま
時の句ふ歌ふ所なし蕪
恥ぢ入る俤を今ふの外芭
財布口き紐かけを菜
逆竹のとてもうを後ろ姿を蕪
物陰のすそ着物を蕪
角

一の姫男の衣ヲ着セ給
鼠角
ほそきき怨の雲ヲ食の痕蕪
芭蕉角
腐れる俤ヲの蕪
餓くとして定ニ蕪
うの出ヲ待ヲ角
朝り二黄金ハ小蕪
足角
蕪

祈藁数茶堰の角そまれん
鷹神を使トス蒸海のまゝ
鐵の弓取たゞき安そむよ
虎様子姫うつのつき
、をく四隅の体を吹あし
押大潜さ指のもし吹
下国后彩をし妃そ月を
西瓜を綾よつまみふく
云ひつと宝珠形のぼる吹頃もん
みちおくの東しゝ石角
武士の裡の丸角故このす
八寸の羽おそまそ生つ

角 蒸 角 蒸 角 蒸 角 蒸 角

行あきんと花を食ハ湯使外 蒸
青一湖日暮ヲ鴛ヒ無ニ吟 角

同

一事二百六十日
西ハ吹雪三ハ白什裏き
跪やて事やし大根こく舟 供角
安そ寸こ浪そ
月そを井の鍋戸布つん い
こもちきそ業をよみのまち
百をう舩と秋をくさ矣し い
傾婦を業の婦そこう

李下

角

栗生氏を要約如斯ならん　二
すゝ熟ふゝ学書れ　和尚
寸法御切の衣体并この記不　芭蕉
堵を力むる幸称嬰大　小　二
俳の為門を天をよ若のゝ　角
凡そ三百人のまゝ　この如く

寛文十戌季

助勝

男を治もさゝれ之肌をゆゝを衣
交ゝゝ二のほゝゆゝ玉民　正敦
かけ作ゝ御玄物まに天渡ゝ　宗房

同

坂ハ家の玉ゝ右力る一栗物　長忠
くふ的矢の、かゝつゝふ秋飛　定敦
冷しき石ハさゝるゝ虎ゝ似ゝ　宗房

同七未季　一百附

扇ゝ名物ゝゝゝゝゝ記新ゐ
ゝをゝゝゝとゝ的おりの家　宗房

好生　新の
志ゐの珍物ゝゝゝ

物う爺さんに
教えました」そうして酒をかえん　訪

延宝六戌年
大坂屋の娘
故手まりれ舟
虫の声の変と
瓜の井ごの
孔子は鯉魚の
教訓する

不二の鵜
飛書

祝儀等不
義をしまし
物多き鬼の
富貴や海
歌橋手大
仁義普
猫柳のお
大宝の沸

何刻着しゝ

の餅食の生　着

酒来返

猫をまをする

ゝ

ゝ

ゝ

ゝ

ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

俳諧一葉集 附合之部 二

古学庵俳号
幻窓 湖中 編
坎窩 久臧 校

貞享元甲子年

秋旬 杜白 杏柱 野水
たそやとばかり望む山茶花 荷兮
うしろ姿の主水が雨傘 重五
新鮮のおもかげ有明の月 杜国
白のうてしく雪来る 芳 西平

赤飯ハ濃くやうにたきてよく蒸らし
髪をやすくつぶしてよくこねまぜて
伽れつゝ——と乳をふるやうにすべし
清汁卒塔婆ハ濃くすこしとろみを
かけ浮き出ぬやうに焼きふくを焚き
加へつゝ——ハ客玉
田中あつゝ小まんぢうの様のものつゝ
壱手舟ひく人ハちんぢの
たゝきの粉を楼子後ろ角柳
味さう——さ河ふやうに
二の尼手振ハ蓮の花のやうに
蜂ハ箸手をうつ様にして

水 菊
五 玉
等 水
菊 玉
玉 水
水 菊

のつ物すゝれすゝく新鏡多体
令うゝみの矢をくゝりかへ
ぬま人ハ祖父の杜に吹きれて
きは家紋の名を付——
笠ぬまて学ぬし小時
あつのれ
きつゝくと砕——八人の骨の
鳥獣ハ夷おれうゝ
あゝれまの法
紋水一斗まる
日東の李
中手本

五 玉
等 水
菊 玉
玉 水
水 菊

[illegible]の位帝[illegible]
[illegible]葉千敷[illegible]魚をいさゝき　玉
季[illegible]物[illegible]うさ[illegible]里[illegible]む〳〵く　等
[illegible]そ[illegible]いそ[illegible]かま[illegible]う[illegible]　水
[illegible]ひと〳〵居[illegible]ま[illegible]賀の[illegible]濃さ　玉
廊[illegible]八[illegible]れ[illegible]みけ[illegible]ふし　五

[illegible]壮[illegible]
[illegible]　[illegible]も[illegible]　野水
[illegible]ま[illegible]　[illegible]入る[illegible]の食　杜國
[illegible]ま[illegible]ま[illegible]　[illegible]の羽[illegible]　翁
[illegible]れ[illegible]　[illegible]ひ[illegible]　等

庭そう月物[illegible]　重五
[illegible]をま[illegible]　正平
[illegible]の宿　玉
[illegible]の[illegible]　水
[illegible]紀を[illegible]　一
床[illegible]　男
[illegible]　等
[illegible]　翁
[illegible]　水
[illegible]　五
[illegible]　翁
[illegible]　玉
[illegible]　五
[illegible]　玉
[illegible]　等

秋もの幸くやと嫁せしの夜一く　水
先ゝくらおまてかくゆき　松
二　松笠ふり餅すゆる宝ものう　等
うくひす起よ我猫もゝて　翁
簾涼く猫も物の夢さへし　水
三　孫一ツ〳〵ん不破の一軍人　五
そさう美濃も夢を春る　翁
納さ先〳〵しおさてと七十　魚
なかめよう法事ふ重歩行ム　五
ひとり門の傘のいとそうさす　等
笹波ふ誘ふ春ふるまふ舟　水
重ねうふ春松を　翁

有ふたてう白猫の髪の毒のあさ　等
毛きぬ猫　猫を　翁
二　秋惜む客ふ猫ふ猫を　水
笈の客一ツ〳〵ふ雲ふ雪ふ　五
我よう花をひとり山の井ふ　翁
ひとりふ典仕の唐ゝ内付ふ　魚
三ツの也翁尾出ふ軍　五
〳〵うみいふ越の猫俗苅　等

杖をひくふ十歩　杜國
清みうふ雪ふ　翁
おもみ伏くそれいふ乃　重五

火を消す火焼き人を呼ぶ　菊
門をの前手に残る雪の上　五
血刀をふるふ本郷の殺し屋　芋
雪下ろす本郷の殺しやみ　水
冬ごもり独立ちくるしく　水
春を待つ桜の樹てし数をのむ　菊
[illegible]ものいそがしき数をのむ　笠
二白蓋[illegible]ぬまを洗ひ　芋
宣育のこと欽を練る　五
八十をこえる尺八重毎朝を　水
ふっくらもる七夕の妻　水
雨音や柱のいたすつもり時　笠

[illegible]ト木ろれや　菊
妙の家を焼く女尺て　五
羽織を乗る[illegible]　芋
休み来る掃[illegible]　雷
つるみる[illegible]　水
水の[illegible]を殺活の多起て　菊
ふるさとの[illegible]　笠
泥手ろもしぬ人の像　芋
粥する焼き芋の[illegible]　五
粥石のこいろ[illegible]　水
小の分ふくしん箱物[illegible]　笠

秋くれて男をせもる村雨　　玉

田家眺望

雲月や蕭のつくく並ひて　　等

冬の初うれあくれ初うう　　翁

梢橋山家めの佗我本柴佛　　重五

ひのすゝする牛の垣うれて　　杜國

音まもる県見よりのうすくと　　羽笠

酌とる童子に薬まりいて　　野水

秋の須旅の住居哀いとうた　　翁

やくくて二尺ゆる寺　　等

寐とゝく桂の花の落るう　　玉

落ちる葉をもる風の音

桂林ひとり老をなぐさむる

老て木葉ちる山の女三十　　五

炎涼ふ人の行衛名　　水

ふ寐よふ山猫の声　　笠

庵さゝらふ夢の葉明半　　等

江を近く狗呑て冬を待　　翁

糸角もよ多い熊　　五

路名簡手ぞくしい　　玉

菜薬ゆるす本風の山号　　笠

骨を尺ゝ山ふ添ふ　　水

七食の箕をもらふふきのめ　　翁

泥のよう尾を曳餌を拾ひくく　　等

御幸手渡むものみくみち　玉
津手越の小角豆のもりし　水
豊公まちに栄つく印　笠
芥子尽の小竹まくもさ　芋
打る音をよみ　菊
静まる餅基のそく角の家　玉
寒朝く狐ものふしき　笠
狗林子屋松子のみち汗麻　水
豆鼓つて毎の表手入　菊
元旦のまれ秋めし　芋
休足木精の強それをうつ　笠
いろ添ふ男猫ひとをを抱て　玉

春の走りすみれを摘をよめ　玉
多年を重ねるの歴わかき　水
山茶色白よ笠の赤うし　笠

同　朋笠

いつの足よりは行をふむ生を知れ　玉
村火手招く　柿　菊子
木蔵のうの下をを数を菜筌しを　重五
檜笠手雷を厄川寺勢参　杜國
浪手路かそん有ハ海　菊
ひとうに松を十の寸改阜山　野水

同年臘月十九日　菊

海芋の葉の野の春ふかめる白し

雪に餘る二百余年糸桐の種まく秋を惜しみつゝ　桐葉東籬

入相の影はそゝめきもみぢ葉を　紫山

雪をまつ風もなくれゆく　菊山

一輪咲くも尊の　蓮菊

棋の立文二ねとらし貝をゆゝ　菊

雪をまつ風もなくれゆく　紫蓮

菊表紙を付ける松の入に　山紫

笠ぬぎかくる衣の砧哉　菊山

秋の鳥のをとづれの聖谷の淀八月淀て　菊山

雪れ雲の人ゆく　菊山

おもしろき石の扇をおし　蓮菊

美人のかたちおもひ　紫山

二蛾眉の舞を惜みつゝ　菊山

生海苔の簡を焼て　蓮菊

木の芽をつゝむ柚味噌の酢をきゝ　蓮山

藪を隔てと姫孫化る紅葉　蓮菊

糸すゝき　嶺のおもしろ　紫
不二の根と　空をうつせる　翁
霜をゆく　鶴のひとむら　山
まつ雲を　綾をうしなひ　紫
名うつくし　姓菊の戸を　押　菊
月向く　み針のひかり　八ツ時　心
根いそく　きりぎりすの　家　翁
残れる　景色をはらりけり　紫
手鞠の　糸くり仕舞ひて　紫
紅葉の　名残の永もち　翁
ちりそふ　音の静かや　伽　山
まゝ母の　新蕎麦の来て　紫

まつすゝき　穂の揃ひ　翁
為事ある　面もち久し　秋の空　雷枝
笹を造てこそ　ふる雨の　やどり　翁
菊の色　多きの家は　菊の匂　艇延
秋うまれ　蜂のこゝろを　菊
汐の猫　もらひ捨ゐむ　本葉の如　啓山

すきまより雪ふき入る袂哉　一茶

雪ながら山もと遠し市の音　如行

古人の中へ出れば秋の来つゝし　箱

翁忌俗称にまぎらはしいのちのやうに　桐葉

梅ちるをいのちのやうに惜しみゆく　箱

行のまゝに枯を餌こぶみやまうの乳　箱

志ゐのまゝに枯る柏原大　桐葉

雪をさく袋を吹おこす　箱

市柴を焚をはなしと猿蹊を吹おこす　閑水

手のやうに俗母の世はなしき　桐葉

此海を笠離れ行ん空哉　箱

むくもりき波のかゝり　嬰　桐葉

木枯を踏ふみ広のふゝ付く　東籟

貞享二乙丑季
三月廿七日

木因

叩端
如行
工山

箱

叩端
桐葉
箱

叩端
桐葉
箱

煙火　湯
川涼ゆく螢を角と放ちけり　葉
午利とる　湯
かしこまる　翁
羽折手酒をこぼす　楊
二条よみ　葉
枕屏風の絵　湯
なまめかしき　翁
三枚の舟　湯
屋住やひとり　葉
そうそうの　翁
いなご等　湯

水汲小僧　湯
有明の　翁
雪八景　楊
村雨のさき　湯
ひとり鬼の　葉
宝尽　翁
男やもめの　湯
風うき大事の　葉
法門を　翁
学舎山　湯
春の　葉

同日

つくづくと枝のもみ殻ちる　桐葉

ひつそりと葉をつく薮の一家哉　同

夕影や池辺の雛をとり来て　四端

清水をすくふ柄杓の上　黄口

柄杓もちきやをすくふ雫哉　東籬

高の古寺手折る　ウ鼻我手折る　工山

雪ちる大佛手水の凍りけり　菊

雪を飛ぶ池の鏡を尺よ　端山

雪ちるや四足門の出入　葉

松風のひそまり酒を飲兼ね

佛をきさむ両会の像　端

鳥羽玉の髪きる女寄来て　菊

夜を先行る秋の初　只有お物さびしう

白々の史系寺の海　山

浪ようよう鰯の骨を載き　薮

時わすれ寒そうやを男　端

二望待て寒そうやを男　菊

玉垂の塔のほそうみえ　桂輯

澂餅の屋を焼の囲手掛まて　端

風手向を重ねの討死　葉

葦ようよう朴の庵を引焼め　山

てしまふまで夜の更ける迄 揖斐 菊

同

牡丹葉を深く入れ家の玉垣 桐葉
名月や湯殿をのぞく窓の雲 叩湯 菊
打ち〳〵と騰子を築く家柱哉 葉 菊
二百ちかくの男同士 揚 菊
たゞさへ引込ミ思案の人うけ 葉
湯手傳ひのすゝき月の夜 湯 菊

等の事くれぐれもいひ遣しぬ
手ぶくろ一ぞく
かしらんの一ぞく
すゝき一ぞく
双の大ゝ
ゝとさゝ
谷吉風をうつく舟の
花菱をそ
菖の泥を
出代の
手ぬぐひ
地雷火
箱
紫
燭
箱
紫
燭
箱
紫
燭
箱
紫
燭

修ぬ御
修正おして
ゝそれて
お菓子の
松の気
物云ぬ
孔の
塩鯛の
風流
桜餅
箱
紫
燭
箱
紫
燭
箱
紫
燭
箱
紫
燭

海まやの松しげき夏の日も　菊
笠迫すぎて雲のまに〳〵　紫
うれしき前に　迫まれば　端

同

秋もはや木々も四方の梢哉　菊
雲の秋つく〳〵咽のこゑ　東籬
生のまゝ気をのむ新茶哉　桂樓
かけろふよる〳〵竹の鍋柵　叩端
後つゝ栗のはつ〳〵うき松　桐葉
ひそ〳〵けさも淀の天守を　二山
夢かさゝ淀の天守を　庵

狂亭の俤千代を只　この寸　菊
事跡千年をはこむ女郎水
かさけの市上の能う沽　樓
等つゝ歌まの葛尽寝　笑
ようをる年はしまるゝ　水

同年六月二日来武於小石川無行

涼しさの湧くや清水　清風
青蓮寺　等き　箱
松風の大ぐ〳〵笑ひ　月
酒店の秋を降るまゝ　嵐雪
社ゝ来るゝ前者の蝶そ　無角
　　才丸

蕎麥作くる手しくく　口腐
そちの祖父を今ハ老ぬ　素墨
鐘を見るたび　風
死てくる手仿彿ハ　菊
おきのしとうち　雪
戸障のふるい小家の新　菊
何宮梨もてあそぶ父の三年　九
家新よくくやれ自慢の一忘屋　菊
舟手売しいのちかきふ　雪
雨をおり朝寒し　風
茶を炉ひらく　菊
既すゝ人を送さもな　雪

明方ハ白服ともなく
晩稲苅干ミちのくの月よ　九
海猫鳴ん為のくも秋　雪
椎の実共俵ん筆の手　風
くしろ人をしる美婦好き　菊
花薄ます玉ちの　雪
小糸をきよ　風
二三尺の鯉手中料理の日　菊
そや通ふをみくむ　雪
氣回の戦ひ　風
逝水やそを拾ぬものハ　九
白そのそみくる　雪

支碎碑の更に遠く
張のすこみうるを
を一息もの
我造る如く輪の
き如く〳〵の衣
つのるれいつく〳〵の人のさまのや
古梵のせうに花四をも
ひろ〳〵み布
引板を業こ
武士のものすきまき織い
七里法華の七里秋風
図三ヶ霄南北をし化し

菊 重 角 九 高 重 風 菊 重 角 九 高 重 風 菊

梶の小ろ。
陰陽師の篇
狂女さよ
情一
昨く味
室内のこ
枯こ
物毛
三里
庵
まを
三陽

祇水きよむ　雪
梅まさに上戸を儲くかくこと　角
おもちをしそ　九
伊綠すれ物の数ハせ　高
入院人毒のせ　雪
一陽を誘ふ正月　風
油桜　翁
漆屋の娘　雪
きのふより癒　角
うぬ幸という犯行　九
名を呼ぶ坂を　高
居の七日　雪
入尉　風

うけくさみ　雪
みの虫や狂詩つくるもの　翁
忠そう犯　雪
動きや石四　角
小女郎小まん大根売　九
血をそそく起請も　高
尺なすの母が門ハ石むき　雪
油屋の娘をさそうの新清　風
汗涼こうし　懐　翁
そそっかし松宝栗をあく　雪
ふることさく小歌の井辺　角
枝をそむく月かな　九

梅さそふしきの
秋葉そ多すてふひとり　　菊　秋風

秀さそふ事急さく杜杷の陰葉
笑そくく山茶のもみち　　菊　秋風
なの雪取殉めとの雪をきそく　　湖春

檜の木北もとの分かれ姿うも
家すら去をはらふ乙うら　　菊　秋風

物語そ今ふし橋今何な
春の雪社蚕幸つく　　菊
業の中と芸の西の並木、　　湖春

かうまれの杉そもの
山ハさそふを役うまも雨　　菊　ふ秋

芝延句御の
文学よ事後
笑もそ帝の秋の朱　　菊　知足

貞享三丙寅

秋情残

日の春をさすのえのみつ　其角

えのみつのうみそ水雲西

古ふるけしきを都のはゆみにうけて

つくね竹う般さくみ

ふる柴戸かな

みきりにうき年の桐の実　文鱗

貞法老人を服仕雲

とも富谷八古くふ

ふるとよりしま柿をくさきまで

本粘まで九し粘

けしきて柴ふるのや

桐の春ふるみ桐ふるみ桐の実ふる

名あるなて本かしの

うえかなる

体ふるく祖桐の実

徒のかえ

ふる村う梢尺ふる

ゆく樟さま

牛方の体長ふるく風体ふる

貴旨の命しかるめ梢ふると

ひれハ宮さ命ふ村八嶋の名

筆し梢をさふる梢を尺て画ん

松風

ととつの舟を棹さして狂者の体孔
子も物の主太伯すら赤特と作る附船
大切し

酒の幌を入運の月　コ齋

四旬日もふれハ稍し千里の招仲流を
まよふくれ作る幌ハ俗を離なくしやん
おもしろものの字きつくし

秋の山多来れるうめるえん　芳亭

物のうちをえて帝もの特もえ体きこと
一酒なたうるる孔子もまよのうみ一うれ秋雪を抱
ととのえたものくはれもいるこ

秋の山と大中と年るる五文字大切の私
ととく人々を敬ふくしく

炭かり　ととくしく　亀　放風

おの白山をの体と尺ふして神仙ハ
ととかり山神ハ炭竈を抱ととまち
仙をあまふと山くも炭ととの白仙
孫千人のをぬをと尺仕ととき白し
里くのまほのふるもり　緑　仙化

附船をあまし炭かの白を納ととの来
まお南仕ととの体ととキ、話し
ようひの体ととキ、話し
来のる弱子　雨おとひもよ　李云

飛華

文鰭

松風

秋の夜の月の光し清ければ
曇なき世の人の心し

芳室

月見ても何を契らん人の上も
我身ひとつの秋にはあらねど

朱陸

秋の夜の月を詠めて思ふ事
有明がたの空にしるしも

仙化

月見ても何を契らん人の上も
我身ひとつの秋にはあらねど

松風

秋の夜の月の光し清ければ
曇なき世の人の心し

疾起くゆめのうちうきんほとゝぎす　芳童

時雨をいとふ今さらの旬しみ波を江と
一ぱをうつしぬるをみるそのかなしさも心
おもしぬのうちうきんほとゝぎす起てしる佳き
舟をうの湯ふ　其角
みるも水をはなれぬ海かな　し
つゝうの湯なとゝふ風俗宗祇しぐれ
うけぬ木ゝうの湯をもよハ茶そのみ
士しよれハそひとりぬ物をおのれおもひ
よをうゝ又此俗の返士し
筑紫やう人の娘をとりつれさく　李下
さる趣向句仮名ぬれおれのし異足きう船

中に風俗人の娘なとゝ
さきうる此之句ふ新し発句とし
松浦の佳魚女をとりつれさく
夫なとゝ発句とし心そゝ
筑紫人のうそひ
除勤の
此句ふ
うくひ
うう
不分

松風

待つのひの隆ハ
除勤のまとゞ

友よふ　嬉、　仏化

友ふ嬉、を此、物こまの　おう

物淋きこころ　ふ

よくうけもつ　歌墨

おもへそいやし　コ斎

嬉のこころ　四季の休をこの

雨と降こころの　歌墨

ふみ伝もこの　芥舌

の詞ぬし　古季吉

こころもつ　門ハ益　午　仏化

歌の休　後陳の寺　岸白

胴なこおうみ　と附こころ　午

理西雲子　物こふ　式先ホ　六七　芥重

寺中こ　屋寺中こ　押吉　狼藉こ　紀ホの

楊水

人のまことをうつすかゞみ
ぬきてかけたる物をうつすかゞみ
大海の水そこひしれぬ所を聖人
かゞみきよくして人の体をうつす
を学ぶ和歌の姿もかくのごとし

楓風

秋の夜の月を
時雨の雨雲一面に
夜の物凄きこと
ゆふべの雲ひとつ
ふきはらふ風
ふかくして物凄き
人のまことをうつすかゞみ

洞水

金山の糸竹の大音
ふく笛の音
右芭蕉翁の句
ふかく入
ふかく
ふかく

朱陰

三
秋ふかき
ふかき
ふかき
ふかき
ふかき

芙蓉
二葛
菊
仙化
芳室

竹うらのをハ森かうとようは　物水
南むく菖蒲の畑のおきうら　不卜
秋と棲をおく屋のつれづれ　文鏡
餅化るあらの庚申を参会　根風
葵手實うるる秋のうらを　菊
庵のうちをものいふ人もなつめ　朱絃
みくき男のいつひすむ内　不卜
篷の雨殺七里をぬるむ　李下
行鈎河地のあみ川つる　物水
ゐなかくるまをゆるしくる　女角
二月の蓮菜人もまさらやや　多香
　　コ富

姉さまの重むうの氣　芳童
胸ゆるぬ我の袖を識うるを　菊
おもひのくさ芳の苅さし　根風
菱の雫をきてたく等　文鏡
木魚歩ゆうる山うけもも　李下
困をやうしはもる射角　女角
萩さしむすびなひ　多香
ニ三日寿をうつれなひ　不卜
うらうらの手先を結さ　多香
こ夜満月映うらん安い塔すかう　朱絃
ゆるしハ吉この空のうつる　仙化
名契情をまもれぬきのふと　李下
　　文鏡

[illegible]
[illegible]
[illegible]

城ある友をさそひこす春　翁
かゆ八寸す椒の葬掃雪　其角
よしといきる一歟の酒　嵐雪
月うれく煙火あの上　翁
咏の夢ゟ吹ちのおと　素
生魂ゟ給扨をさ雨おゝ　芭
宵位ゟくさ美女てさき　角
捉所ゟ大墟朔のさゝみ　素
出ゟ宝の材木　翁
春ゟ八幡ゟ寄ゟ前戸　角
ゟ移ゟ板ゟ吹ゟし　芭
仇人のゟ訪ゟ氏を拾　翁

行ゟ付ゟ　芭
峰迄ゟ八重山ゟの犬の声　素
軍の加減ゟさゝ　角
士ゟに心ゟぬ月もも　素
陣生ゟうけゟ　翁
雨傷ゟ訪ゟ清ゟはゟし　角
小姓ゟ泊ゟく葬礼の中　芭
丁寧ゟゟく枕経　翁
ゟものゟゟ次ゟの話蒜　素
ゟまゟ堂ゟしかゟの酎ゟ　芭
ゟちゟふやゟし竹の夕べ　角
寒加ゟ根ゟめゟお給え　素

三月廿日

名吹き七な都尺て姉まして
悟を姓ぬ和橋　清風
足論未を妻ま水茂して　箒白
朱一杯をま陳ハ宿の戸　蜀良
為有を陳ハ宿ここ等　松
枝尺ここしき柳の葉を苅　二齋
葉名手くハ味　芳蘭
肉かれ二句　泡
院子を討ものの使ひの名く　白
一杯の為うけ路うけ陳　良
私ものう奥尺ん　翁
いみ果い降　角

毛種を——きを画のそ　翁
そうの底のおう十等　泰　角
ものそ句時そ　雨　雪
きうくいいて　芳の手けみ　翁
昔ぬくまし　来
つ川とも句初の降次也　雪
四の初急うそ　家のま　角
棄つまむ屋よ　者　来
次そうそ生　翁
縄まれく架本を吹る花もちふ　角
おふ七葉のうけ長ま　雪

生て　捨るれ　ふうしまつう　うく　風
新かうち〜ぬ　敲を　きそ　ふけ　良
ちて　の　餅を　おもふ　山　寺　富
きうを　牡　丹　や　さ　ら〜　泥　舟　白
虹の　はし　め　ハ　ら　を　白　い　ま　紀　角
池　み　そ　ハ　湯　泉　を　さ　さ　き　ま　し　翁
三　ゆ　く　雁　お　ひ　と　り　矣　を　辰　富
いき〜と　宵　ま　ら　ま　行　う　新　ま　き　嵐
男　ま　の　〜　み　白　粉　を　ぬ　る　風
膝　琴　を　明　ぬ　風　鈴　を　き　れ　き　う　角
ふ　う　〜　ま　う　〜　牡　丹　餅　一　つ　白
耳　う　う　く　昧　う　生　う　う　郎　う　翁

汁　を　ま　す　み　波　う　雪　を　ー　て　ア　る　良
れ　焼　て　カ　さ　う　く　ハ　仕　く　う　風
系　う　夢　を　扇　お　掌　翁
楠　新　年　や　さ　〜　く　よ　み　そ　く　角
京　の　月　秋　い　さ　そ　を　く　く　に　雪
神　う　く　物　や　む　人　の　い　う　和　子　白
屑　ぬ　く　袖　の　翠　簾　よ　う　く　ふ　ま　翁
宵　の　ふ　み　よ　ぬ　も　を　み　ゆ　う　く　良
葱　の　よ　て　ま　の　山　う　う　富
云　さ　そ　蓬　窓　よ　捨　て　行　き　猫　風
何　や　う　ふ　く　ー　て　焼　ぬ　薄　翁
お　ま　ま　載　す　よ　ん　ね　と　松　角

車を下る　白

和漢

砂風吹て客舟避烟　素雲
蕪菜蛙　〃
合歓醒　馬上
かなしき人の泪かな　〃
月代見　雲谷
雲添　〃
玉遅
帳を左右に分る　〃
弘旭
智蕃　〃
弧倫嵐　雲

古木枝を垂るゝ岡の辺　〃
気をのむ絵手行ところ　〃
舟鋪風　卓浦
鐘絶日　高川
鳥そゝろまゝ岡の松　〃
食ハすけり牧を出るうま　〃
託敬三　社本
競使五　乗填
花月丈　山閑
藻を枕つくゝもの　〃
蓼銀鮎一寸　雲

箕面の滝
多くの子孫を繁らん　菊
風猿喉　早　乾
よく枕つる秋の染ゆく秋立て
肉を燃やすも冬のみ肉　菊
霧籬顔　墨
露浦月　孰與　墨
如とんそそ　潜雪　菊
そそ枕如旅の涙の珠数と船さし　墨
山伏山　平地　菊
門番門　小天　墨
鶺鴒窺　水鉢　菊

ゆるそそくそそ
おくぬぶ和漢の奇書を見て　墨
隠谷伴蛙仙　菊
墨

婚姻の契をうらなう両
渚芦の結の上　菊
雪のおけ積を
当てそさまる石系のつゆ　菊
入月や落葉のうら武者ひろう　菊
筆の花　筆を呵する　沾
山ちい座を移して　菊

花よりもひやや酒盛りし　箱
みそさゞいにかさねる鏑のつる　沾
きつつき的矧の堅木を穿こそ　箱
縮法を探りて筋ひく　箱
みくれし髪を真すぐにかんざし　沾
烟くゆる軒の夏草　箱
行を焚火よせられ蚤一つ　沾
棒の月ひとつの蕎麦を借てやを　箱
出法ふそもそも素の義うみ　沾
木兎の物うち祝や爭めらん　箱
四十雀ちゝ　風もまだしも　嵐雪

手をや拿の乳ハ墨有秋　其角
筆紅梅をたゝむ玉残　今我
まゝをおゆるさるゝの　若翁
山ふり尺くるみ殻の河　松風
ひとり出多をおもてをさゝ引　船棠
投をさゝをもす秋手ふり　横几
有的すくふ鯛の刻みま　箱
帆を八合手　鞆郎の爭　仙化

古池や蛙　芭蕉こもれの音　箱

山うけを苅田のあぜの秋の夕べ　沾洛

我老ぬ早川の水そひて　樊角

うつろふ命つれなき枝のそく　松露　沾箱

おろさぬ窓つめたき月の雫　沾洛

かりそめの袖を志賀の一神山の民　露沾

笑ふも泪をも少し村の雨　沾箱

捨て戸のよみうるふ法師　沾蓬

行尽そ五天むかふの法えなく　樊角

鼓吹修行路法をみつる　露沾箱

志をたつ強盗山の松く深し　露沾

去ぬる秋を風葉　箱

蓬の下うる蚊の巣　葉箱

漆きぬ琴や仏つぬ菊の友　素堂

蔓の箱ふく秋こそ園　箱

飽ぬ夜の月てるを喜て　沾園

貞享四丁卯

松仙子をそしてく芳野のもどるうう

きんすをやすく旅のつと

時そ秋十一神山の民

下もとも紅葉の角　箱

月清く白雨洗ふみすれ稲　沾蓬
雲をつうふく鯉てそしける　女菊
花吹て人しまるうまの尻　露荷
獣相撲扨〻山　沾荷
二作法ありやたらの陵のまうえて　露沾
塵ありうう時うを　沾法
楠の葉を糸久葉をも綴う　菊
半手ゆうう　露荷
物うけハ思ひやまこ角くれて　沾荷
琴をおすうる君のひさうふ　沾蓬
すをいて神服をかいかう　露荷
九鵜指すう尾上くれき　露沾

同

風のうまふ籠張のひうく　沾蓬
大口をうう旅の雪そ紀　菊
くもふく旅のむれを重木まひく　露沾
ひうくすれを切そうう書　沾荷
三一柳の記念の恵寿　藤う　露荷
為を取めくお　露荷
両うけて張手　露沾
陳跡をの行る君物ふの　沾蓬
雅機巻のかきおて　沾荷
柏ふ多みすへう　菊
桃華

江戸きそくやかよんいくみ　濁子
蓑蛾の蓑手ふるふ月　菊
貝ひろひしゆく殘なれさ　嵐雪
酔てくハ人の扇そうつく　其角
ふみ知てゐもしろや祖父の筆　菊子
松杉苗木蟬の淨土寺　角
泥の穂てそそめ垣結そ　重
みあと入帆の尼ゆる石松哉　子
奇の冲を画よのうれる筆の跡　子
妹とかーら北る名梅やさき　菊
北念てふ袋ぬきまれ社そうく　重
筆をとゞきく室の新酒　子

はの玉おるはくと物てそ　菊
二枝ふるうの笹ひ　重
一寸の生命をとむ　子
苗代もゆる雨そよう　重
蕾の巣のいとりそ　菊
秋百下ふる　子

同

冬ふ年人そそ市の物　濁子
晴をふ入ゆの重　其角
季の食結ゆゆく後——そ　菊
火をたく舟の星そき空　仙化

月入す電秋
ての等をそ
塚のゐ女ご
邦を軍そ
花のおくる
す餅をゆ

十月十一日餅を食す
旅人と系名呼ぶも秋の暮
まる山茶もをかしくて
飽鈴の宮よりまたのしきる
粮をかしる山のみけの朝

来　菊
の秋　菊
れゆくそ　宮
つる種つむく　化
日実る　ゐ

菊

由々
葉菊
松風

かみつくき生の
新一　春暮　月
市の秋画工一
触てく一
菊植や次男こ
窓くそ狂
酒飲て乞女
和月のそを
餅約納つく
等一両年
そ一女児
月そやほん

久鰊
仙化
高笑
歓水
金峰
嵐雪
執筆
菊
そ
菊　杭
風
鶴

萬葉集の中の歌
枕詞をつかふ例
連中よき寺の簷をかりて
神こく歌をめされしは
名所の千鳥の
なく事を
二月の時節
萱のめけめのも
光のめを縄をふ
夫をつかれし
ぬく花の下濱の松
いのちをおもく舟こぐ
化
峰
菊
雲
吹
水
化
々
菊
吹
化
角
峰
海
雲

起出こまものつ
志くぬおもを
教うるやうむ坂のうち
小祠さひしお
その戸おを
学尺し果
蓮おしもうやし
幟おさして
牧物の笛をふ
侶うへ
尺若と文字
堺のおき
雲
水
峰
海
菊
吹
化
角
雲

隠家や寡居生の友に交りなん　水

花にむさ海若するふけなる　翁

含浮むなくしハむれ本芽のみ　尤

奉志られたる春の山る　之

香久雪とんとも旅人の白を咲て

旅人と香尺ともやさむ室の空　如行

さうつき宿し佩ひさつゝへ　翁

又中の珠の本職を荊よえて　桐葉

高ふ手多りゝ延の砂原　行

小倉川に翁ひおむのふ頭しても　翁

様の古枝を添手折らへ　柴

ウ

露霜子儒山より村の雨を待く　行

もあり若し夜の貴寫　翁

物くいて居翁うちまず物ないひ　柴

まさうみ古寺東うへしつ　行

穂龍手尺ともと摘ぬる山の餅　翁

志らし乞思し栄人の笠　柴

椿似る家もさひしき妻の風　行

之々月おそく節句知らず　翁

称を入る卯川いそく花の陰　柴

子み洗侍の寺う乃称あする　行

浦郎信手よむ白髪とえらむきふれ　翁

植て皆髪の百本の竹　柴

芭蕉翁不快にして止ぬ

雪酒寺烏犬業言寿子烝鳥井雅章郷の
俳友子のかりそめを和す　翁

糸すゝくハきさらぎ中海の月　業言
よき志ほうつて物ひろふ　知足
小蛤ふえとなりの風　如風
酒拿もしハうらの雲をおそうひ　安信
強粉し跋跑の霙をいそしく生　自咲
償ハおろ〳〵花ウ
ふり川三反晴めて　重辰
明なは命の飯をみつ　信
ふ〳〵舟おもひのうら山ぶき　吹

降いくよ雪の末の　翁
千鳥わすれぬ一ツ足　雪
ふるさとをそゝる風の梅の香　酒寿
数々ある無の油よ冬つゝく　翁
分て癒おそく秋ハ肩苦し　風作
物書のかたへをそむ月の雲　作
物枝お撰すちりつゝ　作
山神をそのまゝ猫のまゝ　風作
こゝろ季を取こゝろ二十年　作
父の軍を　是
松のみそ汁　翁
降いくよ雪の末の　吹

雨なども和らぎ晴れ女　舟泉
家をおおいつくすみどり
千般の香れる春を楽しまん　洞碧
笑ましき春の昼の静けさ　水
門辺の新芽ふく風　洞碧
笑う人のまどうろう　子
能行く宿を尋ねる峰の鶯　菊
秋のかえりを解つつ自　雪
うのしと律儀な雀の待ちかねつつ　人
啼くもしるし　泉
尼寺のまき垣ふくとくさと　洞碧

玩弄ものを
久のうの軒
布施二十
ひろげて
食しくして
松立の中を
久小数刻を
埒のまでひ
ほそき小時の
月もの小砧
物をうて
山橋をあ

雪人
子菊
碧泉
水洞
人子
菊泉

山ひなむ——その紅葉 駒 雲
きてうけさ乃般若の ふもとく 同
猶うひそうひうう 隠うひうう 人
何ものものうう 花の陰 水
義の井うも 桂山 ふき 雲

早蕨の閨を尺とる事
松 雨 ふ 佛士の 埋 火 安信
築山のうれも 梅を植うけて 自笑
あふる梅のもとを そのひつて 知足
うたの形 枝をかの 月のかのうし 葉言

箱

一里の 毎 ふ 川上 如風
絹さらさめて 門 重辰
市ふる 雪 ふ
生みれうみく 京 ふ
梅 雨 ふ 梅いひき
月を 作 風
雪 ふ 箱
雪 ふ 作
辰

山ぢをみとをしいけし
二季曙亮社湖舟
角切屑子化粧いう雪
きり雪のふとこころひさく桃の内
雛もとめぬ客をとゞめて酌ふる
庭もる子狗つゐ一おの船知
式をおもかるそのふところさく
湖舟朱の山川は
探す題もとめぬ夕すみ
をもしろみ雪火のうち
雛有客が里の嫁が新酒

是非　吹風　菊屋　是非　作者　吹風　菊屋　是非

すきそめるくれ荊和ひく
雛客子ぢきた時の宿もす
ねうねる亀ふる
氏人の庭園ぬ花さうう
智いくも能の
園こゝろあるに山すの
かぶりをおもふる　執筆

菊屋　吹風　是非　作者　吹風　菊屋　是非

十一月廿四日　湖舟さ
湖舟ふるさと清し雪の苑
鹿真弓鏡をはらふ曉　菊
石一く越はまゐる　桐葉

なくしかねかなき渡る風止まず　葉
秋旭　帰る山のうけろひ　翁
秋うすき夜すがらの雨ものひとつ　い
窓ちかくうつしてうごく萩の影　葉
こうばしき雪のくろき飯の色　翁
ぬかるみし道めづらしむ秋ふかし　葉
古畑そひくる麦苅て　翁
掛乞や外するとろろ汁　葉
松明て食ひめくる秋の夜　翁
雪もよひあらし吹出す内　葉

就中峰の
温泉小みち
吐畑の女小さ
注意
二新雪
ゆくりなく
多湯の一里
ゆくりなく
初雲いく
物云
能登
淡路

葉　翁　葉　翁　い　葉　翁　葉　翁　葉

おのうむ杉そも仏そ也と一そ 菊
ゆうくの聲一村雨風 葉
秋山の小松ともる夢しに 菊
そ一筋をかしかる螢 葉
優婆塞の淨衣ぬ 菊
首人起すうつゝ 葉
恋ゆゑぬれ袖いつ雨の雫 い
ま柳のうるほひそうなよ 菊
石打の下露をみも咲 葉
春の秋手法みあり 菊

秋くれ初し頃の菊 如風
緑士の葉と
沙羅の志ほくとまれる梅 菊
殊を秋手さうつゝ 葉信
矢中れおほほを長き雁の 重辰
ゆーこはすゝたてみ簾巻 角吹
音うふつけしひよこ鳥の家遠て 知足
木隠様そぬ添手ぬ 裳言
ゝん佛のそちつく 住
寺ゝをゝけ古ゝの山芝し 沙足
放てっ郭公 吹
菊

雲おほき籬の菊
楪けし朝の霜や
秋や昔三千年も
以乃〳〵をけふ
ちはとつゝ裏まく
痩ゝゝ手はまゝつれ
米ニ〳〵にかの戸むら
山のふゝひきぬ
わの恵ハ岸をも
うきふをもゝ
ゝゝのみと小の
跋尾手はゝゝ

作 屋 是 作 風 作 吹 是 作
雲

いろ〳〵有数
ゝ手似ゝゝ
枝にく沸代の
きゝゝ剤
貝のかゝを
新句ゝ
母のいのちを
半時手
おふの花か
ゝ永く雪の
乃名称を

菊 屋 雲 作 屋 菊 作 吹 是 作
雲

笈
聽廣
如行
野水
越人
夢
執筆

笈
雫
杓
人

人
水
杓
人
雫
笈
杓
笑
人

富士画くを文ともする
帳を座入るる客ありし
新年ともなりぬ

水竹人

十二月九日一井等を訪ふに在宅無りし
帰路雨ふりいでしかば先生の有難
き家ゆくつまる筈也
ともはくつまる筈也
ともしくと答をもつまる杉焚て
残滓をたく
琴声のむしろの上を伴ひ
座をゆれば清らかなる夫
越てやさしき

一井
載人
昌樹
箒
雙竹
東瞻

春もる雨の強く通ふ夜
こゆつくいとゞ孔栄栗の音しと
手児ども〳〵みの虫竹父
布袋祖師次男の秋の風
和尚の肖
ひと例とうき妻もを文字をおもふ
集戸たゝきて通ぬ
注してきぬの筒ぎ栗
ひとうき姿手枕
寺の中杜栗筌
銭ふ栗屋ともまろび栗
旅衣尾張のみ十葉

水竹人
雲
箒
水竹人
雲
箒

みよし野の　　菊
花もて又そ　　好人
乳をのむ　　碧
麻姑を望　　子
萱をうゑ　　竹
タ三の　　脛
るとかや　　菊
小男鹿の　　人
萩の　　子
本うゑに　　碧
もうけて
つく時ハ

餞別

対面して　　岸白
大根も　　菊
松風も　　渓石
初雪ハ　　渓石
降ひろげ　　二ツ
菊の　　甚角
強　　卜千
餅二　　嵐雪
す事ハ　　白
強ぬ　　菊
時す　　石

同

松江

菊

菊

菊

菊

菊

いろしの雪をそそぐ月哉　嵐雪

樹をよそに千年おもふ秋をこそ
月ぞんと泊りなの雁哉　菊
　　松江
そそ法師箱根人を分ひ三河哉
越後哉せゝろ浪よする法をはじめ哉　菊
珍らしや旅の宗匠の焼食や　古峰
　　知足

砂丘のうしろ松をぬく力哉　越人
いかの口より月のぬけ出る　菊
物うやうやしよ砂丘のあしたかな　越人
くもりをかくす秋の月　菊
　　知足

芋掘尼子旅もやそれ　越人
菰巻や更行秋のうの花　菊
きそもまもしまふ見送る　知足
海士の子の舟こぐまゝに頭巾　菊
胃戸より高よをん時角を出て　人
　　知足

夢ぢ　の　雲ぢ　等　も　菊

宇治橋供出用なる氏雲完ぐ

村もる　むみの雨

水を　たたく　酒井の大漁　自咲

私つまく　岸の三服　葭　枯て　知足

宇宙を知見の俳句を綴りす　菊等

いく　筏　繋ぐ　それ　流れ　物　綴りす　菊

筏　のく　ものそ　ふる　雪の　月　菊

ものおもふに　秋　菊　枯　きる　野水

市人　手　いそぐ　年の　金

酒の　戸　たたく　鏡の　枯　梅　桃月

鈴の　音　先　ふり　梅　毎　杜園

索、すと　ものぐさ　年　金　如行

秋の　文　る　まし　多道

私　ひて　櫛　もき　竹　冴る　菊等

汐　の　をやきを　ふる　洲　先　魚　野水

海　ぞく　山　より　墨　る　雪　月　菊

降　つく　秋の　暗　る　海　く　し　執筆

麦蒔くころハまた客やそろひもて
みそとさうし山菜咲し 越人
金の色 雲すゐ丸の宿ろひて 野人

いそくころハまた客やそろひもて 翁
秋の
雨雲の
三十餘手
何共山の
かや 羽せ

翁 左見
怒風
野人
支考
故江

菜のむさくるしきも雪の枕うち 翁
もりこぼれぬ笠杉の為 越侶

かくるゝは村家阪を首下る 翁
角のとくの男生ひるもの 去芳

奥享丑戌辰年

仙の木枯をふくも寒し 益完
都下多賀をふくも寒し 又玄
寒海老等の指をそろへて

二聲のすゝ行雁もきゝあへず引つゞみ
秋をへだゝる夜半の衾哉　平庵
秋をへだゝる夜半の衾哉　鰭近
秋ウ猶旅寐の雨の音　清里
門ほそく老ゆく秋のかなしさや　光
山は雨こゝろぼそくも暮れ行て　翁
女のさゝ声もなくなく船ぞこす　庵
横雲に酒をくみかはす野人哉　翁
陣の夜雨手綱のうそ寒く　光
白雲の行衛を指て帰る雁　里

はゞめてそゝぐ雨ぬれ初る稲　庵
まゝの雨を絡う横織ゑりそへて　翁
二筋程走りつゞく指のくまもん　光
西東うつりもやらぬ秋の空　人
忘れ草ほのめかしやる山の井　翁
ま袖を絞り追手に起し暁　光
たゞこゝに吸かゝりたる月の影　庵
待のうれしき物うき事　里
頼うち乗の一さを敲とも　翁
頼の主よ舟ハさしうち　光
あるじうち筆表ゆる秋の暮　翁

芳
梢
菊
字
菊
菊
行
陽

如行
叩陽
閑水
菊
桐の葉
東籬
工山
桂樹
執筆
行
陽

松の橋のかけつそ〜風
色移くをはそ中秋なる俤
かくきは文の秋ともよ 紫 菊
隙間の雨ハ冷〜そさえ
一雫まてしるき青 神の森 山
雫をもをくしてありさきしかる 梅
重ね〜ありの雫のそくもきのみ 陽
二筋ハそくもかくる雨 行
俤義士をみ〜ら榛のそうして 灰
そそみていそると編の汗拭い 紫
非人とも 菊
行そもちるう
ひそう羽折の一つ紋 水

ますと書く一寸の雪 行
宇梅は庭の雪の白し 山
やうし 紫
又一てそいまれを持おりけ 菊
何事ふ 梅
古里れ石のそくる方の井 陽
まおの杜をいくつ豆 水
お十二そる秋の沙弥男さ 紫
不浄をよけそ金剛の法 菊
経書を束ねまう書ねちる集 灰
おさもうる儒者の小宅 山
公使の花を古池と秋気ん 行

那ゐ一とおもふくらゐく　梅

蓋る七夕祭の夜のしらべ　箱
麦種まみよろこひの声　知足
二ツ一ツと笠する鳥のみえて　桐葉
うくさそふ秋をも待し名残哉　叩端
作りてもたのむ神の御供ひ　業言
うれしはかりの秋の夜　自峻
拾うみそ薬ようふ庵と再き記　如風
名乃をそそうふきそ　雲
その夜の松千一唱きめ一宣　重辰

長者の臺を投もの　箱
多勢をそ待こゝ彩のうへ　足
岸そかうふる八百の湾　紫
棄遣そおもふ新の月さうう　端
るもの多ふ新の月さうう　扉
る秋の秋すゝきの梅しお　足
猫をうへ八猫をそれてのう　風
うへ新猫そ着うへ女房そけて　紫
姫めるすゝきをまをしくて　主
二てもそ組つけそまちやう　端
亀さうつき紙せねふさゝみ　箱
天まさく物そ通してやまひく　作

無玉人翁百呂京巡文

藪の中よりこゑ
秋の雨なり
宵なれど
ひとりと人の
ウ 本堂ちる枝の
芭蕉
秦
多井
死
ふる

きこえなくなれば
みよう給子給さし指で又ゐ
ゐ戸をひらくめる
早咲の物を兼
嫁をぬ娘の
ものひきうすこうきる
儘きやきをうる松のともし火
ゐやお粉をまぶしてを。投をて
ゐをを等、ゆくくきてきやう
菊手まる砂の茶うち物を明
すものさうむうきのみ等

人及
等菊
隊及
人虹
菊
隊
虹

元禄元 九月廿九

いろ〳〵の菊とひらくの白ひる
松のひきをとうたの秋
古丸子る的春の新そ
をの。やきる人のようえる
子ゐれ学ひをを投をようそ
物質へ松のをうあるやう
時ゆうう何をきるくて休やを村
等をうなきあうくて作ひきん
被とう新手新
時髪剃んをよ
精ゐうる和く

叩端
桐葉
菊
東籬
立山
閑水
狐筆
端
紫
菊
蔵

谷の底はかすかにて一羽鳴くうぐひす　依人

山吹の散りてかなしき井手の里　菊芳

仲そばの花ちる数窓の塚　芳翠

旅人いそぐ谷の蕨を生ける　菊翁

涼川の歌

夏ごろも薄きすがたの月　菊翁

洞ふかうしろの月　い

蚊をうけて月にたたずむ窮屋かな　つん

野をそめる秋の夕雲　人

鮎宿の大きさうなし　い

初夏や垣根の板　苔翠

時雨とも名をいふ井の雫哉　菊

井の底各の雫いろは翠かな　友五

南うら雨もりなきさし　菊

ものもまをのそく山のそうび　芳

女房ども姫のかけのまゆくて　人

聲と物のうすき夏の友　五

春柳ごとくなびきそむる　菊

まき止ぬ雫の戸ゆて帰るまも　翠

さし残しの蚊帳の吹ちる　菊

秋風やうをぬぎめの名よう　人

風ふき帰る市人
何ぞと名を問ハるゝ乞食の袋
醫のおもてをそむけて
いそうしと物もの乞ふ寺の鐘
ひそ〳〵と花はやく
武里ふ旅そのせめ
きぬ〳〵やねまる
風かおるやう
月よ〳〵の宇都を
まよ〳〵の法師さま
物祢くまも舟
月よ〳〵の宇都を

人
箱
人
箱
人
箱
人
箱
人
箱
人
箱
人
箱

ふる〳〵と花ちる
彼れ戸の釘ぬき
足あとさびしき
垣ねの根ぬ
物さびしき
人ごゝろ
初潮ふ
岩ほ
垣ねのさゝ
あやふくに
枕の雲ハ
ゆく月のふ

人
箱
人
箱
人
箱
人
箱
人
箱
人
箱
人

船もをく 菊子 庄城 人
秋の河を荷をぬるゝ引て
さゝ〳〵きのふ今日と来る 菊
いの名〳〵尾府の本家 人
跣もさるゝ 菊
谷の陰渓義方 人
河水を 船おろ 菊

大通院花象追善

そかちやとや柿本の杖の長 菊
子ら来て恒の沖 名菊
簗ゆうみの仰ぐまで雨止 芝翠

風のきゝうに物の
内洞のくぼのゝ洗う舟 友五
油筵をのけるまゝ 素雪
色めいやうに冷うる物うひて 流通
そそよおもてなき 曾良
共八来て 雪
あうう 菊
川のそこ 五
晴を起す 翠
芸の角風 通
地子稲 菊
拾ふ 良

世の理をうみをの子一つの物　良
哥の紙筆の先にうつるめ　通
はなの小船を浪人谷川　五
二ながき夢の隈と朱さなかれし　製
良のほくろもしくやむひかる　通
筆をむすこく春むの内　菊
猿八木末は松うつるを　五
苦生一佛の膝を枕して　良
うたゝ、ねして世覚のめる音　菊
根和子ゐもむ春の新　週
無一ふめますむ春の一株　製
高源寺甘空の傍の戸をゆく　菊

外の雪花をうつす硯ゆく　五
注ぎをうつす岡のうれも　菊
茶屋の子酒をかけて八人手拍　良
落をも重ね　製
うみわくる浪の砂　通
故手もとくかふる笈摺　五
清き紙子着をうつす　菊
まうく一つの一対　良

きの秋八木下の住う季まよ　汲通

[illegible]
[illegible]
[illegible]

嵐雪　寒そうに　ゆとり　ない　菊
秋山ふかし　何やら　住めり　翁
こもり人　なぐさめ　かねつ　五
おもしろき　句を　ひねり出し　秋の末　通
ゆく年や　ちりぢりに　なる　人の　顔　翁
へつらはず　まめこくじゐる　世渡り　良
俳をほこ　銭ずき　なども　ある　通
するごとく　ほめられ　ほこる　五
名ばかり　発句　集に　残りけん　水
笑ふべし　一頭治の　ものがたり　菊　翁

雪　あまり　深くて　住むという　白
くもすずめ　きりの　通ふ　海の　塩焼　紅通
はしめて　ものの　あはれも　秋を　菊
みけるとや　嵐雪の　発句　有難　友五
郵便　箱の　書き　おろし　曾良
一里ゝゝ　毎に　塚　立て　宗波
人ゝゝて　見たき　松　かな　嵐竹
かりけるを　聞きて　松の　釜　雨洞
うるさく　おそく　なる　秋　菊
おもうては　はたと　三年の　物　緑
通

麻の羽折　菊

ものあめ二尺の七五三を季の名　菊

蓬竹うき世の雨の雫哉　桂掃の伴　錵水
鶺うき俤のかな口有てて　曽良　嵐竹
村の秋風ふくおくり狐哉　宗波
孤松淋の湯もる峰の月　詮通
栗を拾ひ松葉を焚し夜寒哉　友五
雲一重ぬる秋の里の菊宴　泥芹
三味線を時雨てもつと　菊

はうて物の棚の納むしろ　菊　通
菜ひるの蝶を畳ふ清士の裏　良
稲妻よりの秋を待うに梅うし庵　水
名月に指うさ竹の雨　波
雪よりの桃線鬼よむ春　菊　通
俤の為をうくよる秋の蚊　五
茂のうちも皆八九ツ　菊
半鐘の音を蒙むる夜の妓　竹
清き水きき記の垂　菊　波
雄峰　登かかるに毎夜ごと
祝をねとく春のけものさ
契をねうしおぼつかなき

あふさかの　関もる人に　菊ひさを
男もねむし　姉さすされを　通
浜の真砂　梅を鼻紙　をるまでも　菊
老の寝覚　ハ升のうすの　賢けき　五
まふふこう　修はさへ　うつきそ　小
娘の寒き　茶碗二ハをを　夏の　通
めのみすさく　擬さきそし　良
甲突川　流れをつくる　濁り酒　波
宗そ　それそれ　和歌　五

菊の酒手酌　みひよろ　菊

きんしするおもひもの　横うれ　菊
春のうそやく　まゆうれし　採九

客もや来ぬ　一すゝみ
二人しそいさ　大あふ　瓜　艾角
哉物の　痲のきぬ　湯枕ひそ　菊

雅良

風そよぐ楢の小川の夕暮
秋来ぬと目にはさやかに見えねども
葦間を渡る風の音かな

ひさかたの雲の上まで聞こえあげよ
君が千歳を祝ふ琴の音

木のくれ茂き庭をも掃き清めよ
今来ん人の跡と思はん

嬉しきを何に包まん唐錦
裁ちて着よとも贈る人なし

秋の月
雲の絶え間を
見るとても
舟の入りぬる

本家
村山